

二宮の驛では寸時下車して、春子と久子さんに遇ひたいなど言つて姉を弱らした。

でも僕の胸には、弟が死んでゐるか、死んでゐないかの問題と、黒子の女が國に居るか居ないかの問題があつた。

静岡で鯛めしを買つて、二つも一遍に食つたり、野田に、久さんかお春さんか何方かを、都合に依つて君のワイフに世話するが好いだらう』など、冗談言つたりしながら、僕は横になつて毛布を頭から被ぶつてねてみたりもした。

動搖の激しい汽車に、動搖の激しい精神を載せれば、安定するとも思つてゐるのかと、僕は不平を言つたりもした。

大阪へ着いたのは朝の一番だつた。

驛前の旅館で湯に這入つて、めしを食つた。

姉は電車に乗つて鷺洲町まで行つて来るからと言つた。

其の暇に僕は、大阪市にもダ、の宣傳をやつておきたいと思つて、大阪毎日と朝日に寸時寄つてみたが、まだ早いので誰も来てゐない。